資料 18. 被災文化財等一時保管施設の環境管理について（今後のカビの防止から）

2011.12.12

被災文化財等一時保管施設の環境管理について
（今後のカビ防止の観点から）

被災文化財等レスキュー委員会、東京文化財研究所　情報分析班

　秋から冬の時期にかけては、気温が低く、また太平洋側では比較的湿度も低い季節になりますので、カビが大発生するという事態にはなりにくくなりますが、春になり再び気温や湿度が上昇してきますと、現在の保管品や保管環境によっては、一気にカビが発生する事態も考えられます。

　ここでは、できる限り今後のカビの再発を防ぐために、どのようなことに気をつけたらよいか、いくつかまとめました。

１．保管上の留意点
　可能な範囲で，お願いいたします。

　春以降に温度・湿度が上昇してくると、再びカビの被害が発生することが懸念されます。したがいまして、

・可能な限り、環境の湿度は 65％未満になるよう心がける。
・環境の湿度制御が難しい場合には、季節の良い時期にできるだけ資料を乾かしておいたうえで、とくにカビが懸念される被災文書などについては、茶箱や衣装ケースなど密閉できる容器にアートソーブ、ないしはシリカゲルなどと一緒に入れて、湿らないように保管する。
・カビが生えやすい資料がある場合は、できれば除湿機の準備を考えておく。

　などの対策を考えておくとよいと思われます。

(1) 資料の配置：　できるだけ通気性を確保します
　　床置きの場合は、できるだけすのこを利用し、壁面からにぴったりつけず、壁面から少なくとも 10cm 以上離して置くなど、通気がよくなるように心がけます。

(2) 換気：　実施は温湿度の安定している時期のみに
　湿気の少ない天気のよい日に実施します。人がついている日にのみ実施し、けっして換気扇をつけっぱなしにしたりしないようにします。また夜間は必ず換気を切るようにします。
　（注意：梅雨時や夏季などに換気をして、湿気の高い時期に外気をとりこむと、かえってカビの原因となることがあります。）

(3) 清掃： ほこりがたまるとカビは生えやすくなりますので、保管場所および資料についてできるだけ心がけます.

(4) 遮光・断熱： 資料に直射日光があたらないように、必要に応じてダンボール・厚紙の利用、カーテン、暗幕の設置などを考えます.

２．観察

(1) 温湿度

＊とくに、湿度のチェックはカビの発生を予防する点で、非常に重要です。
60%RH 以下にできれば、カビの心配はほとんどありません。65%RH 以上になると、カビの発生がおきる条件になり、70%RH をこえるとカビがかなり生えやすい条件となります。

自記温湿度計，データローガなどにより定期的 (1 か月に一度ほど) 状態をチェック・記録すると理想的ですが、そのようなものが入手できない場合にも、市販のデジタル式温湿度表示計でも役にたちます。

(2) 資料

初回の点検およびそれ以降、気になる症状がある保管品があれば、写真とともにコメントを記録しておきます。

例）におい、カビ、虫害、色、さび、変形、形状変化、割れ、裂け、など